

～本島と我が島の違いに驚く～

島のあんやたん・かんやたん ③7

伊平屋島



東恩納清二さん

(68歳)

＝浦添市

「伊平屋スーテー（歓待の心）」島人の誇り

僕はテニアン島で生まれて、戦後1歳の時に家族で伊平屋島へ帰って来た。中学1年の時に兄弟で那覇見学をした際、開南近辺に遊園地があって非常にびっくりしたのを覚えている。中学卒業後島を出て、当時、那覇市泊にあった沖縄水産高校へ進学した。とても驚いたのが、話には聞いていたが水道の便利さ。島ではその時まで水道がなく、共同井戸を使っていた。弟と僕が水汲み担当だったので、水道を初めて使ったものすごい楽で、こんな楽なことはないと感動したことを昨日のことに覚えている。

子どもの頃、島ではどの家庭も農業が主な収入源だった。それだけに稲刈り時期に台風がやって来ようものなら、学校の先生は生徒をすぐ家へ帰した。自分のところの稲刈りが終われば、まだ終わっていないところへ応援にも行った。うりずんの頃になると、今度は芋かずらを植える手伝いに家へ帰されたものだった。島は田んぼが多かったので、みんなでやらないと追いつかなかった。

朝は牛や馬、やぎのえさの草を刈ってから学校へ行った。通学はもちろん裸足。弁当は芋とスクガラスのことが多かった。中学3年から給食が導入されて、脱脂粉乳を初めて飲み始めた頃は、お腹の調子が悪くなった思い出がある。

海遊びもよくした。海に潜って魚やシャコ貝を採り、お腹がすいたら海の中でシャコ貝を食べ1日中海で過ごしたこともある。夜のイザリ漁では、石油ランプを持ってタコや貝などを採った。

島人はおとなしい人が多く、友好的でんびりしている。島で教わったむんならあーし（物習わし）を紹介したい。「ひーさーしけや 着んくしれー やーさしけや 物かませ」（寒がっている人には着物を着せろ。ひもじくしている人には食事を与えなさい）。「有る物、ねー物むるかませー」（自分の食べる物がなくても旅の人にはあるだけを食べさせなさい）。「伊平屋スーテー（歓待の心）」も島人の誇りである。そんな人情に触れながら、名木百選に選ばれた美しい念頭平松や天の岩戸、絶景の海岸線を走る「伊平屋ムーンライトマラソン」にも出掛けて欲しい。

（野村流三線唄者）伊平屋島の人口1,405人（2012年7月現在）、那覇市から北方に117km、フェリー発着の今帰仁村運天港より41.1kmの位置にある。村は伊平屋島（面積20.66k㎡）と野甫大橋でつながれた野甫島（面積1.06k㎡）の2つの島からなる。第一尚氏王朝を開いた尚巴志の祖父（鮫川大主）の出身地。

時代の逸品に会いに行く

～近代紙幣～

沖縄の通貨は、B円からドル、日本円へ切り替わってきた。では、B円以前の通貨はどうだったのだろう。遡ってお金にまつわる話と一緒に紹介する。今回は近代紙幣（昭和初期）。お金にまつわる話は、なるみ堂の翁長良明さんに教えてもらった。翁長さんは多くの古銭を収集し、これまでに何度も展覧会を開き、その時にお客さんから直に聞いた話だと言う。



だかんけん
兌換券10円（1次10円）＝
1930（昭和5）年～1946（昭和21）年

拾円模合いをしている人は当時まれで、町で見掛けると、「あの人は拾円模合いをしている人だよ」とみんなの注目の的になった。模合いをとった人は、そのお金をお墓や家を作る足しにしていたそうだ。

〈1930（昭和5）年～1935（昭和10）年頃の話〉



だかんけん
兌換券100円（1次100円）＝
1930（昭和5）年～1946（昭和21）年

首里で百円札を両替しようとしたらできず、那覇まで下りて両替したという。

〈1942（昭和17）年～1943（昭和18）年頃の話〉



だかんけん
改正兌換券200円（藤原200円券）＝1942（昭和17）年～1946（昭和21）年

当時の酒屋は、酒かすを餌に豚も養っていたところがあった。ある時、首里の酒屋に豚を買いに来た客が二百円札を出した。酒屋で働いていた人たちは、二百円札を見ようとみんな集まって来た。一般の人が死ぬまでに手にすることがないといわれるお金だったという。〈1942（昭和17）年～1943（昭和18）年頃の話〉

*兌換券とは、同額の金貨や銀貨に交換することを約束した紙幣。

紙面協力/古美術なるみ堂（那覇市・平和通り電話098-987-5530）

チルグワー 昭和の初め物語 ③ ～我が人生を振り返る～



◆70歳から外へ飛び出す！

昔の人は世間を知っている人、知らない人を例える時に、「スーヤーのパーパー（塩屋のおばあちゃん）、マチャグワーのハーメー（雑貨屋のおじいちゃん）」と表現した。スーヤーのパーパーは社交家で、一方、マチャグワーのハーメーは一切外へ出たことがなく世間を知らない。

私は、まさしく「マチャグワー・・・」の部類だった。これではいけない、と70歳になって外へ飛び出した。当時、娘と夫を亡くした悲しみ、苦しさを少しでも忘れたい思いもあった。おもしろそうしの勉強やウチナーグチの復活などが新聞に掲載され、行ってみようと考えた。ウチナーグチは浦添の公民館で集まりがあると書いてあるが、浦添が果たしてどこにあるのかさわからなかった。軽貨物で会場に連れて行ってもらい、なんとか辿り着いた。すると、参加している人から「ご出身はどこですか」と聞かれた。「山原、本部です」と答えたら、「その出身ではないです」と言われ、混乱した。どうやら学歴を聞かれていたらしい。「無学大学卒業です」と答えるや、「どこにありますか」と返され、困った。

10歳の時、学校で方言札を渡され、死のうかと思ひ悩むほど辛い経験をした。無学のおばあだけど、ぜひとも方言を復活して、その時の恨みを晴らしたい一心で無我夢中で行動していた。

チルグワー（プロフィール） 喜納千鶴子（きな ちづこ）
大正12年旧暦6月25日生まれ、90歳。本部町出身。60年前から那覇市で雑貨商を営む現役の店主。沖縄語普及協議会会員。3男4女の母。



イラスト・福島律子